Japanese Association of Educational Psychology

Jap. J. of Educ.. Psychol., VOL. IX, No. 2 (1961)

要求水準と個性*

川村短期大学

帆足喜与子**

Frank(4)は，要求水準を「自分の過去の成績がわかつている既知の仕事に関して，次に到達すべき目標として表明された要求の高さ」と定義している。

多人数について要求水準を研究するとき，目標の高さをそのまま考察の対象としても意味はうすい。なぜなら各人の元来の能力の程度によつて要求水準の持つ意味は異なつてくるからである。同じ高さの目標であつても，能力の低いものにとつては飛躍をめざしていることになるし，能力の高いものにとつては，大した努力を払うつもりのないことを示している。そこで，要求水準の意味するところは各人の過去の成績と比較することによつて知りうるとし，人びとは目標と前の成績との差を目標差（Goal Discrepancy Score; GDS もしくは D-Score）とよんでいる。

目標のたて方は，人のそのときいる場の雰囲気によつて異なる。たとえば，名誉にかけて争うようなときと，親友同士相互にそんたくしながら競うときとでは，たとえ同一人が同一の仕事をしたとしても，目標のたて方は異なつてくる(12)。また同一人において仕事の種類によつて異なる。たとえば，切手収集家は珍しい切手を集めるについては高い目標を掲げるが，自分の関心のうすい品物を集めることはどうでもよいとおもう。

さて，要求水準はまわりの状況や仕事の性質に支配されるのが事実であるが，それにもかかわらず，個人の内的条件というべき個性のもつ役割を見のがすことはできない。状況によつて影響をうけながら，なおそこにその人らしい目標のたて方がついてまわつている事実が見出されると考えられ，従来個性と要求水準に関し，多くの研究が発表されてきている。Rotter(16) は，要求水準研究の方向を分類して，それが第1にパーソナリティ研究の手段として用いられることを述べている(注)。

本論文では要求水準を個性研究の手段として考察している既存の論文を概観し，あとに筆者の実験による個性と要求水準の関係についての考察を述べたいとおもう。

I 二三の文献から

Frank(4) は種々の作業において，作業の型に関係なく，また実験の状況に独立に，相当永続的な各人の特性が GDS のうえにあらわれることを述べている。Gardner(7) も異なる作業間の GDS の相関として+0.70 を得ている。

一方後に述べる実験の一部としてすでに発表されている報告において，筆者(12) は輪なげ競争において，社会的意味の異なる3つの場面（能力別競争，親友同士競争 Best 5を選び出す競争）のそれぞれと，個人別に輪なげをした場合との GDS の相関を求めた。その中で最も高い相関係数は能力別競争と個人別との間の＋ 0.39 であり2人ずつなした競争の成績にもとづき Best 5 を選び出す遊びと個人別とでは＋ 0.162 であつて，一般に低い値しか得られなかつた。すなわち場面の持つ意味によつて，GDS は同一人において大きくも小さくもなりうるという結論を得た。

Gould (9)が同一人の異なつた作業間に得た相関も＋0.25あるいは＋0.33 であつた。彼女は Lewis との共同論文(10) において，社会的規準が異なれば D-Score が異なつてくることを述べている。こういつたからとて，彼女は GDS の幅の広さ狭さが個人について意味するところが皆無だというのではない。彼女はさきの論文(9) で異なる実験的作業において，同じくらいの強度の失敗への脅威が加えられるときは，同一人において要求水準値のあい似たものが得られるであろうと語つている。同じような社会的圧力に対して，同じような要求水準が得

* Level of aspiration and personality.

** by Kiyoko Hoashi (*Kawamura Junior College*)

（注） すなわち，かれの「人格研究の手がかりとしての要求水準」という論文において，その第1は人格理論に応用される研究，第2は実験自体に対する興味から一般法則や信頼性をみる。第3は精神薄弱者や精神分裂病者等の要求水準の研究としている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

られるということは，また個人の側からいえば，同じように反応しているということであり，要求水準にはそれぞれの特徴があらわれるとの解釈は成り立つ。

さて，D-Score の幅に関し，Sears[17] や Rotter[16] は次のような分け方を試みている。(1)低い（＋）のD Score，(2)低い(－)のD-Score，(3)高い(＋)の D-Score，(4)以上の混合型がそれである。目標をたてた後，仕事を行なつて目標と同等もしくは目標よりもよい成績をあげれば成功感を覚え，目標より低ければ失敗感を覚える。この成功，失敗に対する反応の仕方が，人によつて種々異なるので，個性を知る手だてとなるというのである。

Sears の学童における臨床的研究によると第1に著しく高い D-Score のものは学業成績が低く自信がない。第2に低い(＋)の D-Score をたてるものは非常に確信があり，学業成績に満足感を持つていた。第3に(－)のD-Scoreのものは確信と学業成績が前2者の中間に位していた。が特に変つたことはかれらは自意識が強く，自己に対してというよりも社会的に志向する動機を持ち，失敗に対して防ぎよ的であつたというのである。さらにまた高い(＋)の D-Score のものは，たとえ成功しても低い(＋)のもののようには緊張が解けないことを彼女は摘している。

彼女はまた可塑性指数というものをこしらえた。それは要求水準を上げ下げした（shifts)回数を全要求水準数で除したものである。

1940年ごろまでに相当に多くの人が要求水準にあらわされるおもな人格的特性をあげている。Hoppe[14] は野心，慎重――勇敢，自信――劣等感，および現実にたちむかう勇気を指摘し，Jucknat[15]は失敗を恐れる傾向，野心，慎重さを取り出している。

Frank は注意深さ，野心，現実に直面しようとする傾向[4]や自我水準の関与（invol vementl of ego-level)[5]をあげている。がさらに1941年，要求水準についての概観的な論文[6]の中で，自信，野心，主観性，願望は高い要求水準にあらわれ，一方現実的であること（地に足のついていること)，注意深さ，自己防ぎよ，失敗に対するおそれは低い水準にあらわされるとしている。また目標差の幅がひろいのは，自己自身と競争するときと遊戯的事態においてであるとも説明している。

Gardner[8]は1940年までにあらわれた要求水準とパーソナリティとの関係についての諸論文を参照しながらまず次の4つの観点から GDS の扱い方を整理した。すなわち，(1) 全体の GDS の平均（Score A)，(2) はじめの進歩が見られぬころの GDS の平均（Score B)，(3) 著しく進歩しているときの GDS(Score C)，(4)業績の平均(ScoreD)。一方被験者の次のような種々のパーソナリティ側面について4人の評定者に評定を求めた。評定は日常生活場面に加えて実験場面の観察や両親との話し合いをもとおしてなされたものであつた。評定の項目は次のとおりである。(1)主観的業績水準 Hoppe のいう自信のようなもの，(2)自己の地位に関する不満 Hoppe, Jucknat, Frank のいう野心，(3)安定感，(4)知的な業績に対する重要視の程度(自我関与)，(5)失敗にまともにたちむかうことのできる傾向，(6)失敗に対する恐れ，(7)現実性(Frank のいわゆる地に足のついたということ)，(8)動機づけ，で，これらと上述の4種の GDS とのひとつひとつの相関は全部で32個得られるわけだが，＋.30 から－.26 までの間の低いものであつた。それにもかかわらずかれは方向は期待どおりであつたとして両者の関係を積極的に支持している。

かれは高い(＋)を持つものは，(1)自己の地位に不満のもの，(2)知的行為を重要視するもの，であるとしている。また低いレベルは失敗をおそれてたてられる。かれの実験では，高い aspiration level と低い aspiration level との間に，当人が現実的であるか否かの度合いに関する差異は見られず，どちらかといえばむしろ低いレベルのものが現実的でなかつたと結論している点は独特である。

Cohen[3] は 50人の異常緊張型患者，喘息患者，精神神経症患者について充全感（feeling of adequacy）および自己受容（self-acceptance）と要求水準との関係を見ようとした。充全感についてはなんらの関係がつかめなかつたが，自己受容に関連し，目標を著しく高くするものと，それと逆に著しく低くするもの((－)のD-Score)はともに自己拒否的であることがわかつた。これにさらに解釈的説明を加えれば以下のようなことであろう。能力に即さない目標をたてることは防ぎよ態勢をつくることである。非常に高い目標をたてておけば結果は失敗という形に終ることははじめからわかつている。到達できるかにみえる目標を逸すれば失敗感に心を乱されるが，無理な目標に失敗したとて苦しくない。また容易に到達できる低い目標をたてておいた場合も失敗感は経験しないですむわけである。こういうたぐいの人間は自己の失敗を失敗として受容しないで，真実から顔をそむける型だという。これに対して自己受容的のものは小さい(＋)または小さい(－)の D-Score を示すとする。こういう人は自己の能力とあまりかけはなれないところに目標をおき，失敗すれば当然失敗感を味わうが，それを自己の進歩に直接関係づけてながめる。失敗に際して，D-Score を（－）にすることもあるが，それも極端に低くするようなことはない。Cohen より以前に Hoppe その

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

他多くの研究者が後者のようなたぐいの人を，自己の失敗にまともに向かうことのできる人とか，真実を見つめる勇気のある型の人とよんでいる。

Rotter[16] は Cohen と平行した考え方をしており，低い（＋）と低い（－）の D-Score および中等度に高い D-Score が自己評価として社会的に容認された仕方であると述べ，さらに非常に高い（＋），もしくは大きい（－）の D-Score であるとか，次から次へ目標を高めつづけてゆく型，固執的に常に同一目標を維持する型，あるいはまた直前の成績と同一のものを目標とする型などは社会的に受け入れられないような型だといつている。

比較的最近の要求水準に関する研究のひとつに Atkinson[2] の "Motivational determinants of risktaking behavior" がある。かれは行動にあらわされたところの動機の強さは場の cue によつてひきおこされた目標到達への期待との函数であるとする。そして動機と実際にあらわれた行動との関係を説明するに3つの変数を取り出している。すなわち incentive（＝目標の attractiveness）と expectancy（＝cognitive anticipation，客観的認識による可能性）とそして動機である。動機は誘引性に到達したという満足感を追うもので，目標を追う意図の強い人は，目標到達によつて満足することも強いという Winterbottom のことばを引用している。

Hausmann[11] もまた，すぐ前の成績をそのまま次の目標とする（achievement following）のは不確実な人で，こういう人は簡単に意気そそうし，外界の圧力に抗しえないと指摘している。かれの研究は種々の精神病者においてなされたものであつたが，同一目標を固執することは偏執病患者にみられるという。また少々の成功のあとにでも目標を高め，しかも失敗したときにも目標を下げないものは攻撃的であるとしている。また目標を高く掲げるとそれにつづく成績がかえつて低下してしまう。つまり自分のたてた目標の高さに脅やかされてしまうようなもののあることも指摘している。あるいはまたあまのじやくの型で，成功すると目標を低め，失敗すると目標を高めるものがある。

ついでながら Frank[6] は抑うつ患者の要求水準は自己の成功失敗よりも，社会的規準に敏感であるといつている。

このように見てくると，学者によつて D-Score の解釈の仕方が多少異なることを知る。Sears は高い（＋）は自信のないことを示すとしているが，Frank では反対に自信のあらわれとする。また低い要求水準は現実的であることを示すと Frank もいい，一般にこれは認められているが，Gardner においてはむしろ現実的でないと結論している。

これまで，たとえば Frank[4] がパーソナリティは作業あるいは場面から独立に永続的特性を示しているといい，Gardner[8] もパーソナリティは驚くほど固定的な実験上の変数であるといつているように，要求水準をたてるさいにパーソナリティが端的にあらわれるという考え方を見てきた。ところで一方，パーソナリティよりも環境的影響や場面的要因を重くみる考え方のものを，2，3挙げてみよう。

Anderson と Brandt[1] は，成績と次にたてた要求水準との相関をとつてみたところ，－.46±.04であつた。このような数字の出ることは，Frank のいうような用心ぶかい人が（－）の D-Score を示すというのと一致せずそれならばよい成績のものが用心ぶかく，悪い成績のものが大胆であると称さねばならなくなる。実際悪い成績のものが高い水準をたてるのは家庭などで不可能な成就を要求されているから，いきおい非常に高い要求水準をたててしまうのであつて，パーソナリティによるのではないとかれは語つている。

Frank[13] も，社会的地位の低いものは要求水準の高いことを認め，要求水準は通常作業の困難度に関する自己の能力の判断と，高い成績を挙げたいという願望との折ちゆうであるといつている。

Rotter[16] も長い間失敗を重ねてきた歴史を有する人間は GDS の高さや範囲が通常と異なることを指摘している。

また Holt[13] のように，要求水準は野心ではなくて，失敗に対する自己防衛であるとみようとする学者もある。

要求水準が直接パーソナリティを反映するにせよ，それよりむしろ環境的影響の力が強くあらわれるにせよ，健全な目標のたて方はどのようなものであるかを通観してここに要約すると，成功すれば目標を上げ，失敗においてはそれなりに目標を下げるというふうに，成功失敗に応じ目標の高さを調節する。しかも目標は成績からあまりかけ離れず同一人の同一作業において常に同じくらいの幅の D-Score を保つことであるといえるようである

すぐあとに掲げる筆者の調査においては，だいたい Gardner[8] がしたように，要求水準とパーソナリティ評定との資料から考察をし，要求水準がパーソナリティと直接に関係するかどうかをみてゆきたいと思う。

II 要求水準実験による個性の研究

1 方 法

10個の輪を投げることをもつて1回とする輪なげを1

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

場面につき9回行なわせる。各回の成績を記録し，同時に1回ごとに「次にいくつかけたいか，そのめあて」を各人に書かせる。輪なげの行なわれる場面の性質を4種に変化させた。第1場面は個人別に行なう。第2場面は能力別競争（第1場面の成績にもとづき，能力の類似した者同士2人ずつを組み合わせて競争させる）。第3場面は親友同士の競争（生徒自身に好きな相手を選ばせて2人ずつ競争を行なわせる）。第4場面は Best 5 をめざす競争（Best 5 を選び出すことを予告して後，無作為の組みあわせによる2人ずつの競争）。

一方，クラスの受持ち教師に次の7項目について，被験者ひとりひとりについての評定を依頼した。

(1) 自分の地位に満足するか
(2) 安定感を持つているか
(3) 失敗をまともにうけ入れることができるか
(4) 現実的であるか
(5) 明確な意図をもつて仕事を遂行しようとするか
(6) 競争心が強いか
(7) 人と妥協的，または協調的か

評定は3段階とした。

Table 1 各場面における GDS の平均，4場面の平均およびその範囲

被験者＼場面	個人別	能力別	親友同士	Best 5	平均	範囲
K. M.	1.00	1.75	2.13	1.63	1.63	1.13
E. S.	1.88	1.62	−0.25	0.26	0.88	2.13
F. M.	0.63	2.13	0.87	1.75	1.35	1.50
M. G.	2.50	1.50	1.38	1.63	1.75	1.22
Y. S.	3.75	2.13	2.00	1.88	2.44	1.87
H. N.	3.33	2.13	−0.25	1.30	1.13	3.58
Y. T_g.	2.88	1.88	0.87	−1.00	1.16	3.88
S. N.	2.88	2.63	2.00	1.63	2.29	1.25
M. N.	3.25	1.75	−2.38	−0.13	0.61	5.63
C. S.	1.88	1.88	1.38	1.00	1.52	0.88
Y. M.	1.13	1.25	−0.13	−1.00	0.31	2.13
Y. T_h.	4.13	2.00	2.38	2.13	2.66	2.13
R. K.	2.00	2.38	2.22	2.63	2.31	0.63
N. M.	1.00	1.25	1.13	0.88	1.07	0.37
K. N.	1.50	0.87	−1.75	0.25	0.22	3.25
N. S.	1.88	1.50	0.50	0.63	1.13	1.38
Y. K_t.	1.13	0.13	0.87	1.50	0.91	1.37
K. K_w.	1.38	2.22	2.13	2.13	1.97	0.84
Y. U.	0.75	2.50	0.87	1.00	1.28	1.75
C. B.	1.38	2.13	1.25	1.63	1.60	0.88
S. S.	1.38	1.88	0.13	−0.25	0.82	2.13
Y. I.	0.87	1.75	0.50	0.63	0.94	1.25
K. K_t.	1.62	1.75	0.38	1.00	1.19	1.37
Y. K_a.	−0.38	0.22	0.50	1.63	1.97	2.01

2 被験者

小学校5年女子生徒 24名

実験年月日 1957年6月〜7月

3 結果

各場面各回ごとに得た各自の D-Score をさらに場面ごとに平均した D-Score が Table 1 に示されている。

同時に，各人の4場面における平均 D-Score と，場面ごとに異なつて示された D-Score の範囲，すなわち，最大の D-Score と最小のそれとの間隔が計算して掲げられている。

要求水準はさきの成績にかんがみて，次の成績を期待するものであるから，回を重ねるにつれて水準を上げ下

Table 2a 各場面においてとられた要求水準設定態度の型および4場面通じて変容した型の数

被験者＼場面	個人別	能力別	親友同士	Best 5	4場面通じての型の数*
K. M.	a	a	a	a	1
E. S.	a	a	b	c	3
F. M.	b	a	a	a	2
M. G.	b	c	a＋b	b	3
Y. S.	b	b	a	a	2
H. N.	a	a	b	a	2
Y. T_g.	a＋b	b	a	d	3
S. N.	a	a	b	a	2
M. N.	b	a	e	d	4
C. S.	b	b	a	b	2
Y. M.	a＋b	a＋b	a＋b	a＋b	2
Y. T_h.	b	a	a＋b	a＋c	3
R. K.	b	b	b	b	1
N. M.	a	a	a	a	1
K. N.	a	c	c	a＋c	2
N. S.	a＋c	a＋b	e＋c	a	4
Y. K_t.	a	c	c	a	2
K. K_w.	b	a＋b	a	a	2
Y. U.	b	a	e	e	3
C. B.	a	a	a	a	1
S. S.	c	c	c	c＋a	2
Y. I.	a＋c	a	d	a＋d	3
K. K_t.	a	b	a＋c	a＋c	3
Y. K_a.	c	c	c	c	1

* たとえば被験者K. M. は各場面 a 型であるから型の数は「1」であり，E. S. は a，b，c の型が出ているから「3」である。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

げする態度にいくつかの型があらわれてくる。

a型　成功すればそれに準じて水準を上げ，失敗すればそれに準じて水準を下げる。適応的。

b型　成功，失敗にかかわらず一定の水準を保つ。固執的。（本実験では4回以上同一水準を保持するのを固執とした）

c型　成功すると水準を下げ，失敗すると水準を上げる。反動的。

d型　要求水準が成績を大きく下廻る。

e型　態度に一貫性がない。

各人の各場面における態度はTable2に示されている。同表に見られるように，あるひとつの型が純粋にあらわれることなく混合している場合があり，また上述の5型以外にも，部分的に成績を追う型（achievement following）が見られた。

Table 2 b　「4場面通じての型の数の」欄を度数別に整理したもの

型の数	1	2	3	4	5
人数	5	10	7	2	0

$x^2_0=4.168$　df＝1　P＜.05*

Table 3に各類型の全場面通じての度数が集計されている。それによるとa型が最も多く46.5回である。b型は25.5回，c型は17回，d型3.5回，e型3.5回である。

Table 3　要求水準設定態度aないしeの各型の出現度数

a	b	c	d	e
46.5	25.5	17.0	3.5	3.5

しかし，本稿でより重要なことは，各個人が各場面においてとる設定態度が同一であるか，異なつているかということである。

Fig. 1A は各場面において一貫して同一態度を示す例，Fig. 1B は各場面に異なつた態度を示す例である。

Table 2 b の型の数として示してある欄において，各人の態度が場面ごとにどれだけ変化したかが知られる。たとえば1とあるのは，各場面を通じて態度が，1種類で変化が見られなかつたということである。Table 2 b に集計してあるように，態度の一貫しているもの5名，2種のもの10名であるので，計15名のものがさほど設定態度を変化させていないことが知られる。態度2種以下のものと，3種以上を経験したものとに分けてその差を検定すると危険率は5％レベル以下で有意義のことを示し，設定態度は十分に個性的であるといえる。

Fig. 1 A　各場面における成績と要求水準（N. M. の場合）

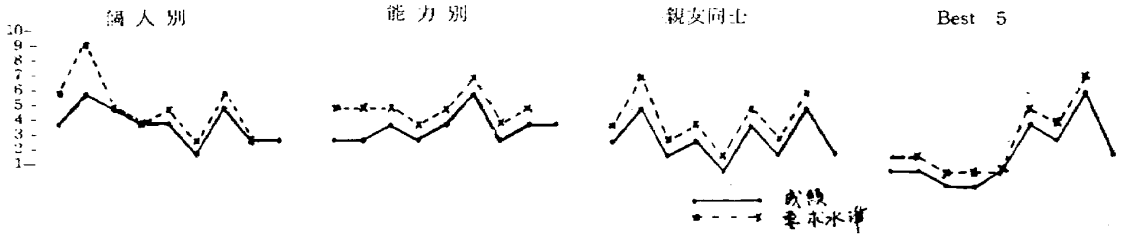
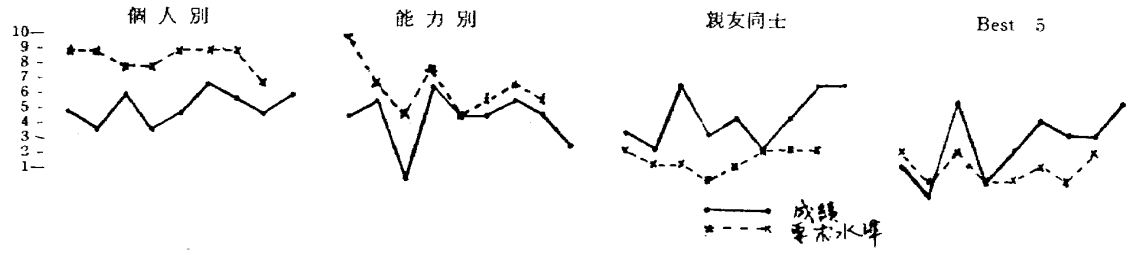


Fig. 1 B　各場面における成績と要求水準（M. N. の場合）



* Fig. 1A は各場面一貫してa型の例。成績に平行し，水準がだいたい同じ間隔で上り下りしている。Fig. 1B は個人別においてb型，能力別においてa型，親友同士においてe型，Best 5 においてd型のように要求水準設定態度の一貫しない例。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

さてこれら5種の設定態度と，それに GDS についてさきの項目に関する教師の日常の評定といかに関連するかを調べてみよう。評定一覧は Table 4 である。「3」はその度がたいそう高い。「2」は普通。「1」は低いのである。

ここにあらかじめ予想したいくつかの仮定を示すと，次のとおりである。

Table 4 パーソナリティ評定

評定項目 / 被験者	自分の地位に満足するか	安定感を持つているか	失敗をまともにうけることができるか	現実的であるか	明確な意図をもつて仕事をするか	競争心がつよいか	人と調和的か妥協的かまた
K.M.	3	2	3	2	2	2	2
E.S.	2	1	2	2	2	2	2
F.M.	2	3	3	2	3	2	2
M.G.	3	3	3	2	2	2	2
Y.S.	3	3	2	2	3	3	2
H.N.	3	3	3	2	2	2	2
Y.T_g.	3	3	3	3	3	3	3
S.N.	3	2	3	2	2	2	2
M.N.	1	3	2	2	3	3	3
C.S.	3	2	3	2	2	2	2
Y.M.	3	3	2	2	3	2	2
Y.T_h.	3	3	2	3	3	3	2
R.K.	2	1	2	2	2	3	2
N.M.	3	3	3	2	3	2	2
K.N.	3	2	1	2	2	3	1
N.S.	2	2	2	2	2	2	2
Y.K_t.	2	2	2	2	2	2	2
K.K_w.	3	2	3	3	3	3	3
Y.U.	3	2	2	2	2	1	2
C.B.	2	1	2	2	1	1	1
S.S.	1	1	2	2	1	2	2
Y.I.	2	3	3	3	2	2	3
K.K_t.	1	1	1	2	1	2	2
Y.K_d.	1	2	2	2	1	1	2

(1) 安定感のあるものは，適応的でa型をとるであろう。

(2) 失敗をまともにうけ入れることのできるものはa型をとるであろう。

(3) 自分の地位に満足することのできるものは GDS が小さく，反対に不満のものは GDS が大きいであろう。

(4) 自分の地位に満足するものはa型が多いであろう

(5) 現実的のものは小さい(＋)の GDS をとるであろう。

(6) 妥協的，もしくは協調的のものは，社会的場面の性質によつて，要求水準設定態度を変化させるであろう。

(7) 明確な意図をもつて事を貫こうとするものは GDS の幅が広いであろう。

(8) 競争心の強いものは GDS が大きいであろう。

(9) 競争心の強いものは一定の目標を固執する。すなわちb型を多くとるであろう。

(1) 安定感のあることの評定に「3」「2」「1」を得たものそれぞれにおけるa型の出現度数が Table 5 に示されている。「3」を得たものにa型4回のものが2名あり，また「2」の評定のものはa型の3回以下に分布し，「1」のものは4回出現1名を除き下位の辺に偏つている。傾向は予想どおりに見えるが，検定の結果は表示のとおり有意差は見られなかつた。

さらに別の試みとして，Table 5 に付記してあるように，安定感に「3」を得たグループと「1」のグループについて，それぞれ1人あたり平均のa型回数を計算すると，前者では 2.318回，後者では 1.6回となる。これを t 検定すると危険率5%水準以下で有意差が示された。

(2) 失敗をまともにうけ入れることのできる者についての評定とa型との関連性に関し，(1)と同様の手続きをとると (Table 6)，やはり「3」を得たものはa型多数の方に偏つてひろがり，「2」「1」と順次下位の方を占めている。検定の結果，危険率6.15%水準であるのではとんど意義のある差ありといえ，予想どおりである。なお，評定「3」と「1」の両端のグループにおけるaの平均度数 2.55 と 1.5 の間の差を検定すると危険率2%水準以下で有意差が見られた。

(3) 自分の地位に満足と，GDS の幅との関係につき「3」のグループは平均 1.418，「1」のグループは 1.148 であり，仮定と逆の方向を示している。その検定は有意差を示さなかつた ($p<50\%$)。

(4) 自分の地位に満足することに関し，「2」「1」の評定とa型度数との関係は Table 7 に見られる。やはり「3」にa型多く，「1」にa型が少ない。χ^2 検定では有意差はみられないが，「3」と「1」に関しa型の平均度数 2.192 と 0.667 の差を検定すると1%水準以下の危険率で有意差がある。

(5)の仮定については，現実的であるかとの評定が「3」と「2」をのみ与えられているため，両グループの GDS の平均を比べると前者は 1.683，後者は 1.415 であつて，これは仮定と逆に現実的であるものの方が，GDS の平均が高い。そしてこれを検定すると，$t=0.464$,

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Table 5　安定感とa型度数との関係

安定感 ＼ a型度数	4 (3.5～4)	3 (2.5～3)	2 (1.5～2)	1 (0.5～1)	0	計
3	2	3	4	2	0	11
2	0	2	3	2	1	8
1	1	0	2	1	1	5
計	3	5	9	5	2	24

$\chi_0^2=4.944$ df＝8　.07＜p＜.80

安定感評定「3」および「1」にあらわれた1人平均a型度数とt検定

「3」……2.318　t＝2.309 df＝14

「1」……1.600　p＜.05*

Table 6　失敗をまともにうけ入れるa型度数との関係

失敗をまともに受ける ＼ a型度数	4 (3.5～4)	3 (2.5～3)	2 (1.5～2)	1 (0.5～1)	0	計
3	2	5	1	2	0	10
2	1	0	6	3	2	12
1	0	0	2	0	0	2
計	3	5	9	5	2	24

$\chi_0^2=15.00$　df＝8　p＝.061

失敗をまともにうけ入れるの評定「3」および「1」にあらわれた1人平均a型度数と検定

「3」……2.55　t＝2.941　df＝10

「1」……1.5　p＜.02*

Table 7　自分の地位に満足とa型度数との関係

地位に満足 ＼ a型度数	4 (3.5～4)	3 (2.5～3)	2 (1.5～2)	1 (0.5～1)	0	計
3	2	3	5	3	0	13
2	1	2	3	0	1	7
1	0	0	1	2	1	4
0	3	5	9	5	2	24

$\chi_0^2=7.752$　df＝8　p＞.30

自分の地位に満足の評定「3」および「1」にあらわれた1人平均a型度数とt検定

「3」……2.192　t＝3.238　df＝14

「1」……0.667　p＜.01**

df＝22, p＜70%であつて有意差は認められない。

(6)　の仮定については，妥協的かつ協調的の評定「3」「2」「1」のそれぞれの者が，場面によつて態度を何種に変化させるかを配列してしらべた (Table 8)。だいたいにおいて「3」を得たものは態度の変化が多く，「1」のものは少ない傾向を示している。その差を検定するとp＝8.355%　であつて，かなり明らかに仮定どおりの傾向を示している。なお「3」のものと「1」のものにつき態度の変化の有様をみると，「3」のものは1人平均3.75種，「1」のものは1.5種であつて，このように評定の両極端を調べると，妥協的でないものは態度を変化させないことがより明らかである。これら2つの平均の差を検定するとt＝5.422, df＝4, p＜1%で有意差が示された。

Table 8　妥協的ならびに協調的の評定と要求水準設定態度変容の関係

妥協的・協調的 ＼ 態度の数	4	3	2	1	計
3	3	1	0	0	4
2	2	4	7	4	17
1	0	1	1	1	3
計	5	6	8	5	24

$\chi_0^2=9.84$　df＝6　p＜.10

妥協的協調的の評定に「3」および「1」のもの1人平均の態度変容度数とt検定

「3」……3.75　t＝5.422　df＝4

「1」……1.50　p＜.01**

Table 9　競争心の評定とb型度数との関係

競争心 ＼ b型度数	4 (3.5～4)	3 (2.5～3)	2 (1.5～2)	1 (0.5～1)	0	計
3	1	0	4	1	1	7
2	0	2	1	6	5	14
1	0	0	0	1	2	3
計	1	2	5	8	8	24

$\chi_0^2=9.2472$　df＝8　.30＜p＜.50

競争心の評定「3」および「1」にあらわれた1人平均b型度数と検定

「3」……1.643　t＝1.967　df＝8

「1」……0.333　p＝.088

(7)　明確な意図をもつて事を貫こうとするものに「3」を得たものと「1」を得たものそれぞれのGDSの平均は前者のグループでは 1.446，後者では 1.395 であつて，両者の差はほとんど偶然のようにみえる。

(8)　競争心について「3」のグループと「1」のグル

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ープに分け，それぞれのGDSの平均をみると，前者は1.624，後者は1.616でまつたくといつてよいほど差はみられない。個々のGDSのの配列順位をみると，競争心に「3」のものはGDSが大きい方か，もしくは小さい方のどちらかにあり，「1」のものが中間の幅のGDSを示しているような印象をうける。

(9) 競争心の強いに「3」を得たものは1人の例外をのぞき，設定態度に必ずb型を混じえていた。「3」「2」「1」のものがそれぞれb型をとつた度数表を作り，χ^2 検定してみると30%<p<50%となり，傾向が示されたというにとどまる。また「3」と「1」のグループについてb型出現度の平均をそれぞれ算出すると，「3」において1.643，「1」において0.333であり，差を検定したとしろ p=8.8% で有意差を示さなかつた。

なお，仮定にそつて，検討した以外に，資料の観察から得た事実を次に記してみよう。

(10) 失敗をまともに受けいれることに「3」を得たものは，GDSが特に広くも狭くもなかつた。(GDSの大のものから小のものへと順次配列して調べると，「3」のものは，4位，6位，7位，8位，11位，12位，15位17位，18位，19位であつて両極端にない。

そして，失敗をまともにうけ入れるに「3」のものもGDSの平均は1.481，「1」のもののそれは0.705である。差を検定すると t=1.005，df=10，30%<p<40%となつた。

(11) 妥協的かつ協調的に「3」のものがほとんどGDSが大きい。すなわち大きさの1位，2位，3位，4位6位，15位，と1つだけとび離れて24位がそうである。かつ「1」のものは5位，9位，14位と中程に位している。試みに「3」グループと「1」グループそれぞれGDSの平均をとつてみると，前者2.382，後者0.91で相当の差ありとみえるが，t=1.5602，df=4，10%<p<20%であつた。

(12) Table 1の最も右欄は，左欄4列の中最も数値の低いものと高いものとの間の幅を示したもの，すなわち各人が場面によつてどれだけの範囲にGDSを伸縮したかをみたものである。GDSの変化に富んだものは，要求水準設定態度も変化が多いようにみえる。態度変化の多いものには範囲の大きい方から1位，2位，3位等が含まれ，順位で最下位の2人は態度の変化がない。設定態度を4場面とも変化させたグループと，常に一定であつたものと，それぞれのGDSの範囲の平均をみると，前者は2.516，後者は1.192である。検定では，t=1.774，df=10，10%<p<20%であつて有意差ありと断ずるには足りない。

(13) Y. Kd.という個人は4場面とも反動型すなわち成功すると水準を下げ，失敗するとそれを上げたが，実験結果をきかされていない受持ち教師の話によつても，この被験者は非常に陰気でひねくれているという。彼女の父親は母親から別れて家を出ており，家に母親，祖母とともに生活しているが，祖母が実権を握つており，本人は父親について納得のゆかないような説明をきかされているらしいのであつた。

そのほかの反動型を示した被験者K. N.，Y. Kt.，K. Kt.，S. S.はすべて7項目のパーソナリティ評点の合計点の低いものばかりとなつている。特にかれらには「1」が多く与えられていることが目立つ。

4 考察

結果を通覧して，一言にしていえることは，要求水準と個性との関係は相当にあることである。要求水準設定態度は5種挙げられたが多数の者が4場面の間に態度を2とおり変化しただけであつたということは，根本的に要求水準に個性があらわれることを示すものと思う。

被験者のパーソナリティ評定は受持ち教師1人に依頼しただけであるが，受持ち教師は他の教師たちの日常の生徒評の影響をうけており，いわば多くの意見を総括したものであるので，それは単なる個人的な評定以上のものであると考える。特に実験の当該校は年ごとに受持ちを交代するので，学籍簿は多数の教師によつて書き込まれており，それを十分に参考にして，本実験のための評定書は作成されたものである。

さてわれわれの扱つた方向は大別して2つになる。すなわち1つはパーソナリティとGDSの関係と，他の1つはパーソナリティと要求水準設定態度との関係である。

パーソナリティとGDSとの関係については，全体をとおして統計的に検証されなかつた。自分の地位に満足するものはGDSが狭いであろうとの仮定に対し，むしろ逆方向が示された。また現実的なものはGDSが狭いであろうとの仮定も，逆方向を暗示された。多くの学者は地に足のついた現実的のものはGDSが狭いと述べたのに対し，Gardnerが前述したように，低い要求水準の方が非現実的であるとしたのと同じあらわれ方になつたわけである。また妥協的，協調的のものの方がGDSが大きいことが相当に明らかである。こうした人はGDSを大きくしないのではないかとむしろ考えられるが事実は逆であつた。また明確な意図をもつものや，競争心のあるものはGDSが大きいであろうと思われたが，なんら差がみられなかつた。

こうみてくるとGDSとパーソナリティとの関係は見

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

られないか，もしくは仮定と逆方向である。ところでパーソナリティ調査7項目のいちいちにおいて「3」と「1」のグループ双方のGDSの平均は，その差に大小はあるが，例外なく「3」のグループの方が大きいのである。よいパーソナリティのものは一定範囲の目標圏内では常に比較的高い目標をもつと示されたわけである。（ここに一定範囲の目標圏内でというのは，本実験の場合10個が最高目標であるところの実に単純な遊戯であるという条件を考慮するからである）。いくつかの仮定が逆方向を示唆したというのもじつは単にそのことであつたのかもしれない。少なくとも他の要因はそのためにくもらされたということもありうる。

一方パーソナリティと種々の設定態度との関係については，ある程度の結論が得られたといえよう。安定感のあるもの，自分の地位に満足するもの，失敗をまともに受け入れることのできるものは，成功すれば要求水準を上げ，失敗すればこれを下げるというように適応的であることが示された。特に評定「3」と「1」のものを比較した場合には，その差が統計的に有意に示されたのである。中でも失敗をまともに受け入れることは，要求水準行動に関係の深いことであるためか，その間のつながりはよくあらわれ，「3」「2」「1」に分配してみた型度数の検定においても，ほとんど有意義といえる差が示された。

競争心のあるものは目標を固執する傾向があるであろうとした予想は確証できなかつた。

また妥協的協調的のものは場面によつて設定態度を変化させることが多く，これも「3」と「1」を比較した場合に有意差が示された。あわせて，かれらは場面によつてGDSの幅を変化させる。すなわち，あるときは高い水準をたて，あるときは低くするというようにGDSの大きさについても変化に富む傾向にあることもわかつた。さきに水準設定態度が1ないし2種のものが多いことを目して，要求水準設定は個性的であると判断したが変化に富むこともそれなりに個性的根拠があるということになろうか。

成功すれば水準を下げ，失敗すれば水準を上げる態度はいかなる観点からもよい意味に解釈することはできない反応である。これが特にパーソナリティのよさに乏しい人々の間に見られたということには関心をそそられる。

Ⅳ 要　　約

要求水準とパーソナリティとの間に関係ありと認められた事柄は次のとおりである。

(1) 安定感のあるものは，成功すれば水準を上げ，失敗すれば下げるというふうに適応的反応をする。

(2) 失敗をまともにうけ入れるものも適応的反応をする。

(3) 自分の地位に満足するものも適応的反応をする。

(4) 妥協的，協調的のものは場面によつて設定態度を変化させる。

(5) 競争心の強いものは目標を固執する傾向にある。

(6) 本実験においては，常にパーソナリティ評点のよいものの方がGDSが大きかつた。

個人について設定態度が比較的固定しているところから見ても，また特定のパーソナリティと特定の設定態度との関連性の存在から見ても，要求水準には個性が相当にあらわれるといいうる。

本実験の資料整理に関し東京教育大学小宮山助教授に2，3の御示唆をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

文　　献

(1) Anderson, H. A. and Brandt, H. F.: A study of motivation involving self-announced goals of fifth grade children, and the concept of level of aspiration. *J. soc. Psychol.*, 1939, 10, 209—232.

(2) Atkinson, J. W.: Motivational determinants of risktaking behavior. *Psychol. Review*, 1957, 64, 359—372.

(3) Cohen, L. D.: Level of aspiration behavior and feelings of adequacy and self-acceptance. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1954, 49, 84—96.

(4) Frank, J. D.: Individual differences in certain aspects of the level of aspiration. *Am. J. Psychol.*, 1935, 47, 119—129.

(5) Frank, J. D.: Some psychological determinants of the level of aspiration. *Am. J. Psychol.*, 1935, 47, 285—293.

(6) Frank, J. D.: Recent studies of the level of aspiration. *Psychol. Bull.*, 1941, 38, 218—225.

(7) Gardner, J. W.: Aspiration level in response to prearranged sequence of scores. *J. exp. Psychol.*, 1939, 25, 601—621.

(8) Gardner, J. W.: The relation of certain personality variables to level of aspiration. *J. Psychol.*, 1940, 9, 191—205.

(9) Gould, Rosalind: An experimental analysis

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

of level of aspiration. *Genet. Psychol. Monog.*, 1939, 21, 1—116.

(10) Gould, Rosalind and Lewis, Helen B. : An experimental investigation of changes in the meaning of level of aspiration. *J. exp. Psychol.*, 1940, 27, 422—438.

(11) Hausmann, M. F. : A test to evaluate some personality traits. *J. general Psychol.*, 1933, 9, 179—189.

(12) 帆足喜与子：社会的要因による要求水準の変動. 教育心理学, 1957, 第6集, 47—51.

(13) Holt, R. R. : Level of aspiration: ambition or defense? *J. exp. Psychol.*, 1946, 36, 398—416.

(14) Hoppe, F. : Erfolg und Misserfolg. *Psychol. Forsch.*, 1931, 14, 1—62.

(15) Jucknat, M. : Leistung, Anspruchsniveau und Selbstbewusstsein. *Psychol. Forsch.*, 1937, 22, 89—179,

(16) Rotter, J. B. : Level of Aspiration as a method in studying personality. *Psychol. Rev.*, 1942, 49, 463—474.

(17) Sears, Pauline S. : Level of aspiration in academically successful and unsuccessful children. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1940, 35, 498—536.

(1961年2月10日原稿受付)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ABSTRACTS*

LEVEL OF ASPIRATION AND PERSONALITY

by
Kiyoko Hoashi
Kawamura Junior College

Subjects were told to set levels of aspiration under four different social situations in pitching quoits. The four situations were: (1) to play individually, (2) to compete between two persons of the same ability, (3) to compete between a pair of good friends, (4) to compete between two randomly selected persons, from whom the best five were to be announced after competition. GDS' in each situation were recorded and the attitudes of shifting aspiration levels were observed.

We discriminated the following five patterns of attitudes.

Pattern A: Shifting levels upward and downward in accordance with success and failure, adjustive pattern.

Pattern B: Keeping same level regardless of their own performances, rigid pattern.

Pattern C: Shifting upward after failures and downward after successes, reactive pattern.

Pattern D: Setting much lower levels than performance, negative pattern.

Pattern E: Inconsistent pattern.

Comparison of those patterns with evaluation on certain personality traits of the subject revealed this:

(1) Those whose personality was secure showed Pattern A.

(2) Those who faced failure frankly showed Pattern A.

(3) Those who were satisfied with their own status also showed Pattern A.

(4) Those who were conciliatory varied attitudes in setting levels of aspiration accoding to the atmosphere of the situation.

(5) Those who were competitive had a tendency to adhere to the same levels of aspiration no matter what their own performance might be.

(6) Those who were evaluated as having good personalities showed wider goal discrepancy scores than those evaluated as having poor personalities.

(7) Attitudes in setting levels of aspiration did not widely vary within each person.

Upon the whole there was a considerable relationship between personality and level of aspiration behavior.

CHILD PERSONALITY AND CULTURAL BACKGROUND

by
Taketoshi Takuma & Akira Yoda
Gakushuin University *University of Tokyo*

This research was done as a part of the synthetic research titled "Culture and Personality," which has been carried on by the Human Relations Interdisciplinary Research Group, Department of

* We owe editing of English abstracts in this issue to Dr. Ray Simpson of the University of Illinois.

NII-Electronic Library Service